(106)

數少し双眼鏡状のものゝ表面は平滑なり、軸は脆弱にして、加工することを得ず、全部白し、但少し黄色を帯ぶのみ、各ボリプの下には小さくして深き穴あり、高さ及び幅共に一二〇ミメに達す。

本種の上には必ず一種のイソギンチャクの着生するを見る。

本種は北原多作氏の土佐柏島に於て採集せられたるものにして寧ろ稀なる種類に屬す。

雜 錄

● 蝦蟇の毒 ヒキガヘル

市 村 塘

C. Phisalix 并に G. Bertrand 兩氏は此頃蝦蟇の耳下腺及び皮膚より、二種の有毒成分を検出せり、Bufotaline $C_{10}H_{17}NO_5$ Bufotenine 是なり。

Bufotaline は透明なる樹脂體にして、酒精、クロ、ホルム及びアセトンに容易に溶解するも、依的兒には少許溶

四

解、石油依的兒或は硫化炭素には不溶解物質とす、其酒精溶液に水を加ふれば乳糜沈澱を生ずれども多量の水には再び溶解す、斯く稀薄となしたるに拘はらず他の蛙の類には尙非常に有毒なり、主として心臟に働き、神経系統には何等の効果なし、味苦く舌に特種の感を起こさしむ、該物質は水中にて該動物の耳下腺を壓搾して採收するなり、始め稍混濁せる酸性液なるが、之を濾過し蒸發するに隨ひ、稍不溶性の部分は白色膜皮として分離すべし、此物質をば水にて能く洗淨し、再び無水酒精或はクロ、ホルムに溶解し、濾過後純粹のものを得、是れ即ち Bufotaline なり。

今度 Bufotaline を除去したる殘液に酒精を加へ、蒸餾後の殘渣を水中に溶解せしめ鹽基性鉛糖を加ふるなり、斯くして生じたる鉛沈澱をば硫化水素により分解せしめば、爰に他の有毒體 Bufotenine を分離すべし、之にクロ、ホルムを注ぎ、殘着しおる Bufotaline を悉く溶除し (Bufotenine はクロ、ホルムに溶解せず)、且つ又依的兒により醋酸をも除去す、此有毒體は殊に神経中樞に著し

き痲痺を起さしむ、嘗て *Frust* 氏は *Infoline* を分離したれども、是は該動物の乾燥皮膚の酒精浸液より實驗せられたるものなれば、兩氏は是を以て不純粹のものとし、加之此浸液は有毒物質に全く關係なき一物質を含有することを發見せり、蓋し *Frust* の *Infoline* の命名せる體の如きは腺の純粹分泌物中に存在せざるものなり云々

(了)

●勢州桑名産白魚調査に就て

赤松 邦太郎

(107)

四月十六日勢州桑名産白魚調査の要領を得ず唯寶の山に入り手を空しくして東京に歸る疲勞未だ癒へざるに越て二十日飯塚理學士及内山氏生に向て曰く白魚に就て何か調査の報告をせよと生大に驚き答ふるに疲勞と學課の多忙とを以てせり然れ共兩氏中々に聞かずさらば何か書き誌さんといひしに兩氏いふやう然らば題は何とせん白魚の話とするもよしと余其意を解せず益問ふに及んで始めて知る來る土曜日の動物學會には必ず談話をせよとの意

雜 錄

なる事を於此生驚くこと再度直に理科大學長箕作先生を始めとして諸先生に面のあたり此度の結果を報告し以て安全なる防禦線を張れり然りと雖も動物學雜誌編輯主任理學士高橋の君の懇望もありたれば止む無く茲に筆をこるることとなりぬ

山高きが故に貴からず木あるを以て貴しとなすとは古人の言なり、河深きが故に貴からず魚あるを以て貴となすとは是れ生の言なり山と川、木と魚との差あれども其意のある所は一なり然り而して魚類中白魚を産する川に至つては其數果して幾何ぞや此れ生の未だ調査中に屬するを以て明言すること能はずといへ共日本全國に於て其數の多からざるや必せり白魚は讀で字の如く白き魚にして淡鹹水の間に居る小き魚なり斯の如き定義にては餘り簡にして明ならず若し夫れ伊藤圭介氏の定義をからんか長さ二三寸身扁く纖長にして鱗なく潔白なり唯眼睛の黒點あるのみといへり白魚といへば白き魚なれば皆白魚なれ共生のこゝに云ふ白魚は繪殘魚の事にして西洋流の横文字にていへば *Salmon* なり *Günther* には *Salmonidae* の

五